

ジグソー法における足場かけ

森川由美 (創価大学)

キーワード：ジグソー法、専門家グループ、ホームグループ、足場かけ、応答

1. 研究の背景

ジグソー法は1970年代にアロンソンによって開発された学習法である。アロンソンが用いたこの学習法は、1つのテキストをグループの人数に分割して各自が担当した部分を読み、その後全員で内容を共有して問題に答えていくというものであった。現在、授業において用いられるジグソー法には、学習者がホームグループと専門家グループという異なる次元のグループで活動を行う形式がみられる。ホームグループは課題の答えをみつけるためにクラスをいくつかのグループに分けて構成されたものである。各ホームグループではメンバーに専門を振り当てる。各メンバーは振り当てられた専門について個人で学習するのではなく、同じ専門を振り当てられた他のホームグループの者たちと専門家グループを構成して学びあい、その学習成果をホームグループに持ち帰り、ホームグループにおいて課題の答えをみつける学習を行っていく。

専門家グループにおける学習は、後にホームグループでの学習が控えていることから各学習者の責任は大きい。また、どちらのグループにおいてもグループメンバーとの協力は必須で、お互いに平等な関係での学びあいが求められる。したがって、ジグソー法を用いた学習はケーガンの協同学習の4つの定義（①互恵的な協力関係、②個人の責任が明確、③参加の平等性、④活動の同時性）を満たす協同学習といえる。だが、ホームグループと専門家グループという2つのグループ学習における協同学習の質にはどんな違いがあるのだろうか。

2. 研究の目的

本研究では、ホームグループと専門家グループにおける学習者の学びにおいて、教授者の発する問いが学習者同士の会話のなかでどのように展開していくのか、「足場かけ」に注目しながら学習者間のコミュニケーションの質について探求する。

足場かけ (scaffolding) はブルナーによって提示された概念で、ヴィゴツキーの発達の最近接領域 (Zone of Proximal Development: ZPD) の概念をより具体化させたものである。ヴィゴツキーは、いまは一人ではできないが他者の力を借りればでき、後日には自分ひとりでもできる事柄の領域をZPDと名づけた。このZPDに適切に働きかける作用が「足場かけ」である。そのため、ジグソー法を用いた学習において、学習者の思考は教授者の課題提示から出発し、「推測」を行いながら仲間の知識を「足場かけ」して新たな知識を形成し

ていくといえるだろう。

さらに、ジグソー法による学習には知識定着型と知識構築型という区別がある。したがって、知識定着型と知識構築型における各学習において、ホームグループと専門家グループで学習者の学びはどのような差異があるかについても言及していく。

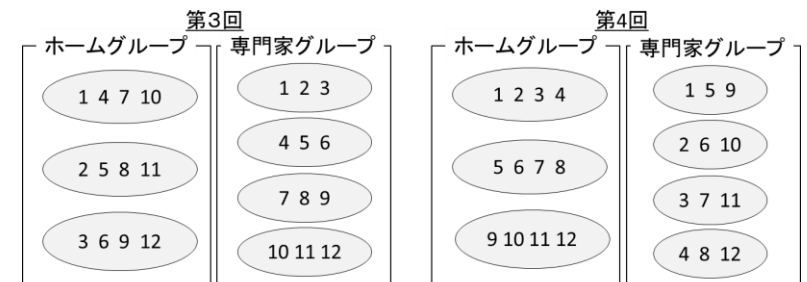
3. 研究方法

大学生に集まってもらいジグソー法を用いて学習する実験を4回行った。1回の実験では12名の学生が参加し、ホームグループ3つ (各4名)、専門家グループ4つ (各3名) で知識定着型と知識構築型のワークをそれぞれ異なる教材を用いて行った。知識定着を測るためのクイズは、知識定着型のワークだけではなく、知識構築型のワークの後にも行った。これら4回の実験を録音・録画したデータを質的に分析した。

会話の分析では特に応答 (response) に注目した。なぜなら、応答の質によって、知識の定着や知識の構築に影響が出るからである。さらに、クイズの正答や知識構築課題への取り組みと応答の関連を明らかにし、知識定着や知識構築を促す学習者間の応答の性質を仮説として提示する。

ホームグループと専門家グループのグループ分けは、4回の実験のうち前半2回では、性差・学年・学部が偏らないように考慮した以外は無作為であった。後半2回では、実験直前に自己肯定や他者意識などを含んだ性格検査をアンケート形式で行い、グループワークへの親和性を測った。性格検査でグループワークに親和性が高いと導き出された順に第3回ではホームグループを形成し、第4回では専門家グループを形成した (図参照)。

図：第3回と第4回の実験のグループ分け



注1) 両回ともグループワークに親和性が高い性格検査結果順に1~12とした。

注2) 第1回~第4回の実験参加者は重複しない。

性格検査をグループ分けに使用した理由は、グループワークへの親和性の高低により会話における応答の質の差の可視化が顕著になると考えたからである。この操作化によってホームグループと専門家グループの会話における応答の差異を分析し、学習者の協同学習の質を明らかにしていく。